

ART CRITIQUE 2016

石崎尚

[レビュー] 空間の筆跡——土肥美穂の近作について 「土肥美穂 Miho Dohi」展 (HAGIWARA PROJECTS) | 石崎尚

フォント化のされていない手書きの文字、とりわけ崩し字のように個性の強いそれを読む。土肥美穂の作品の鑑賞はそのような経験に似ているかもしれない。古文書解読の熟練者がそれらを初見でスラスラと読み進めて行くように、もしかしたら優れた彫刻家や一部のアーティストは土肥の作品の意味を一目で見抜くのもかもしれない。だが生憎筆者はその類ではなく、恥ずかしながら作品の魅力を感じ取るまでに実に長い時間を要してしまった。とはいえ、正確に看取できているかどうかはさておき、作品を見て考えるという行為が長く保たれる作品は、言い換えれば豊かな作品ということにもなろう。土肥は東京造形大学の在学中から一貫して彫刻作品を制作しているが、扱う素材や技法は変遷を重ねている。学生時代の塑像に始まり、石彫に取り組んでいた時期を挟んで、彩色を施した木彫、そして数種類の素材を並行して扱う現在のスタイルに到達した。こうした積み重ねが彼女の作品に多くの滋養を与えていることは疑いない。カーヴィングとモデリングという、正反対の操作を行う二つのテクニックを交互に用いる器用さは、彼女の制作の基礎的な条件となっているからである。

2012年頃まで制作されていた木彫のシリーズは、いくつかの部分から構成されているという意味において、ある種の寄木造(よせぎづくり)と言えるのかもしれない。それは構造に限らず彩色においても明確に塗り分けられており、個性的な部分同士をぶつけ合いながら、全体でかたちの響き合いを引き出すような作品群であった。2013年以降、複数の素材を扱うミクストメディアへ移行したことで、作品が要する加工法の幅は格段に広がったが、中でも布の扱い方は注目に値する。一般的に長期の保存に適さない布は、もとより彫刻作品に用いられる代表的な素材とは言い難いが、とりわけ金属や木材と等価なものとして処理する土肥の使用法は珍しい。

彼女が布に担わせる機能の第一は、表皮としてのものである。《buttai 35》に典型的に見られるように、構造としての金属部分の外側を覆うようにして、視線を引き寄せるヴィヴィッドな色彩の布が接着されている。風合いの異なる素材を組み合わせる着こなしの事を、ひところファッション業界では異素材ミックスなどと呼んでいたが、質感のかけ離れた金属と布の密着に直面した時、正直言って筆者は少なからず違和感を抱いた。とはいえ、よく考えてみればドアノブとそのカバーや、湯たんぽとそれを入れる袋など、日用品の中でもそのような例は散見されるだろう。ドアノブにしる湯たんぽにしるそれを包み込む布製品は、肌が直接熱い、もしくは冷たい金属に触れることを防ぐためのものだが、温度感覚の異なる素材同士の関係を見出す時、土肥の作品には触覚性に対する控えめな言及が含まれているようにも思われる。

そして布の機能の第二は——実にこの点に筆者はいたく感心したのであるが——骨格としてのものである。布を細長く成形したものを、さらに糸で何重にも巻くことで頑丈なロープ状のものに変え、作品の構造を支えられるようにしたのである。《buttai 39》などに見られるこの使い方は、我々が雑巾を絞る時のように密度を上げることで、柔らかく包み込む印象の強い素材の、別のポテンシャルを引き出すことに成功している。加えて既製品のロープを使うのではなく新たに一から作ることで、一定の歪(いびつ)さも含めたハンドメイド感を持ち味に転化している。手仕事の痕跡に関して言えば、近年の作品は素材の多様性に依拠して金属板を曲げる、布を裁断して貼り付ける、など別種の手の動きが生んだ様々な形跡が作品に残されている。それらは細心の注意を払われたというよりは、その先に現れるかたちを早く見たいという、焦燥感に駆られた速度を感じさせる。金属のへこみや布のほつれなどそこかしこに見られる痕跡は、作者と素材との度重なる交渉のプロセスの残滓である。

近作の多くに共通する特徴を一言で言えば、物質に充たされていないヴォイドを多分に含んだスカスカの構造体だということだろう。これは安易にマッサに依存することを良しとしない土肥が、ヴォイドも含んだ上でのヴォリュームを少しずつ作り上げていくことを選んでいるからだろう。作品には様々な素材が使われているが、かたちの単位としては、ワイヤーとロープ状の布が線の要素、金属板と平らな布が面の要素、石膏と木が塊の要素として扱われている。理念的に言えば1次元の線と2次元の面、そして3次元の立体という要素を異素材間で共鳴させることによって、充実したかたちの関係性を奏でているのである。

冒頭で筆者は書体の比喻を用いたが、そもそもフォントの語源は溶かされたもの、つまり鑄造（キャスト）を意味する彫刻的な用語である。しかしながら土肥美穂の作品は、既に流通が見込まれた（文字通り型にはまった）かたちを再生産するのではなく、これまでに存在しなかったかたちをその都度新たに生み出すべく、手探りで素材に関わっていかうとする彫刻家による、手書きのマニフェストなのである。

石崎尚 | ISHIZAKI Takashi

1977年東京都生まれ。愛知県美術館学芸員。